

140 ページ「チャッピーの理由」の前にあった隆志が連れて行かれるシーン

連れて行かないで！

そしてその週の土曜日、カレンダーを見たクミは急に憂鬱になった。なぜなら、明日は別居中の夫に子供を会わせる最初の“面会の日”だということを思い出したからだ。

「隆志、明日パパに会う日だよ」

「えっパパ?!」

一瞬顔を輝かせて、すぐに引っ込める。母親に気を遣っているのだ。笑って「いいんだよ。喜んで」と言ってあげる。隆志は嬉しさを隠せずに笑ってうなずいた。

会わせるのは聖跡桜ヶ丘駅から近い一ノ宮公園だ。多摩川に面した長細い公園で、たくさん家族連れが休日を楽しんでいる。

約束の1時ちょうどに夫が現れた。

「あ、パパだっ」

隆志はクミに遠慮して喜びを隠していた。

「いいよ。パパのところに行ってごらん」

隆志は久しぶりの父親に駆け寄った。

「隆志！元気だったか」

優しい笑みを浮かべた夫はクミとはまったく目を合わせず、隆志だけを見ていた。

他の人が見れば、この優しい父親が実は妻を言葉で痛めつけるような夫であるとは誰も思わないに違いない。

隆志が嬉しそうに抱きあげられる。夫も笑っている。クミだけが苦々しい思いで見ている。

クミは離れたところから二人を観察していた。夫が子供を連れて行かないようにしっかり見張っていないといけないのだ。

最初の離婚調停で調停委員から『子供を連れて行ったものが勝ちなのはおかしい』と夫が訴えていると言われたことがある。武の側からすれば、妻のクミが子供を連れて家を出たために、わが子に面会するのも生活費を渡さなければいけないのだ。もしもあの時クミが隆志を連れて家を出ていなければ、わざわざ出て行った妻に生活費を払うはずがない。そうならなければクミのほうが子供に会うために苦労したはずだ。

面会は一回3時間。公園からは子供を連れ出さないという約束になっている。しかし、クミが目を離したらどうするかわからない。

クミは今住んでいる住所はもちろん、新しい保育所も絶対に知られないように万全の注

意を払っていた。ルナを引き取るのにも、わざわざ家から離れた場所にした。すべては子供を連れ去られないための用心だったのだ。もし今日目を放した際に連れて行かれたら今までのそうした苦勞が水の泡となってしまう。

公園にはたくさんの親子がいる。子供とサッカーをするお父さん。二人を笑顔で見守るお母さん。クミのように“監視”をする母親は他にはいない。腕時計を何度も見た。時計の針はほとんど動いていなかった。故障しているのかと秒針を見るがちゃんと動いている。3時間もの間、意識を集中しているのはかなり難しい。

いろいろな心配ごと頭にも浮かんでくる。子供にとっては3時間たっぷり遊んでくれる父親は最高だろう。もしかしたらこれからはパパと住みたい、ジジやババと暮らしたいと言いつつではないだろうか。今はどうしても長い時間家でお留守番をさせることもある。寂しい思いをさせていることは分かっている。しつけでは、どうしても感情的に怒ってしまうこともある。いつもニコニコ遊んであげる母親ではいられないのだ。嫌な役目はすべて押し付けられている。損な役ばかり。別居の前からいつもそうだった。無性にイライラしてきた。頭の中で夫と口論をしてしまう。

「あーダメダメ。他のことを考えよう」

無意識に悪いほうへと連想している自分に気がついた。気を紛らわそうとほかの事を考える努力をしてみる。

これからホームページをどう変えていこうか。どんなストーリーにしようか。頭のなかでいじりだすとそっちにエネルギーを注ぐことができた。

少し肌寒くなってきた。夕方のお散歩をしている犬と飼い主が見られる。公園で遊んでいた親子連れがそれぞれの家へと帰っていく。気がつくと、もうすぐ3時間が経とうとしている。

(しまった！)

はっとしたクミは慌てて隆志と夫を探した。

さっきまでいたところに二人の姿はない。

クミの心臓がドキドキと早まる。全身に緊張が走る。

いやな予感。

ぐるぐるとあたりを見回す。

駐車場に続く遊歩道に二人が歩いている。手をつないだ夫と隆志がどんどん遠ざかっている。そしてすぐに草木の陰で見えなくなった。

(大変、連れて行く気だ！)

クミは走り出した。大切な子供を失ってしまうかもしれない。

砂利道は走りやすく、クミのひと蹴りで派手な音を立てて小石が飛び散る。

姿が見えなくなったカーブにさしかかると、また先を歩く二人の後姿が見えた。距離にして100メートル。

二人が向かう先には見慣れた夫の車がある。あれに隆志と乗り込もうとしているのだ。

「ちょっと待ってっ！」

クミは周りに人がいるのにもかまわずに大声で呼び止める。

急に激しい運動をしたところに大声をだしたので、視界に一瞬キラキラ星がとんだ。もっと普段から運動しなくちゃなどとのんきな考えが浮かぶ。血相を変えている自分を冷静な自分がみている。

夫が一瞬こちらを見て“しまった”という表情をした。

そこからはスローモーションのように、すべてがゆっくり見えた。

夫がポケットから車のリモコンキーを取り出す。黄色いハザードランプが一瞬点灯してドアの鍵が開いたのがわかる。

夫は助手席のドアを急いで開けて、隆志を抱き上げて中に押し込む。

バンと叩きつけるようにドアが閉められる。その衝撃に目をつぶる隆志の顔がはっきり見えた。

夫はそのまま走って運転席側に回ると、クミとの距離を一瞥して確かめてすばやく乗り込む。

「もう！ダメッ。連れて行かないで。約束でしょ！」

ほとんど悲鳴になっていた。声を出してすぐに息を吸い込んだので、のどがひゅーひゅーと鳴った。

エンジンが始動すると同時に、車は後方に砂利と砂ぼこりをまき上げて走り出した。

脅えた表情の隆志が見えた。

車が砂利の駐車場からアスファルトの道路に飛び出す。急にグリップしてキュキュッとタイヤが鳴った。車体の後ろを沈み込ませて加速する。

クミがもうだめだと諦めたその瞬間。車は急ブレーキでつんのめるようにして止まった。

赤信号で、その先はやや広い道路になっている。そこをたくさんの車がスピードを出して通り過ぎていくのだ。さすがに止まらざるを得なかったのだろう。

急に飛び出てこようとした夫の車にクラクションが鳴らされる。

しかし、それでも夫の車は赤信号のまま無理に左折し流れに入ろうとしている。そのたびにけたたましいクラクションの音が響き渡る。

クミは走って追いつこうとした。

しかし、心臓はバクバクと激しくなり、息は苦しくなって体が動かない。足がもつれそうだ。

全力疾走でそう何百メートルも走れるものではない。

隆志を乗せた夫の車まであと20メートル・・・10メートル。

そのとき、助手席のドアが開いた。

転げるようにして隆志が降りてくる。

「隆志ッ！！」

犬飼ターボ 「オレンジレックス。」未公開シーン

「ママぁー！」

クミは大声で自分が居ることを伝えた。耳が聞こえない隆志には届かない。

夫がドアを開けて出てくる。

クミのほうが一歩早く泣いている隆志を抱きしめる。

「イヤだー！ママといっしょにいるッ」

夫が抱き合っている妻と息子を見ていた。呆然とした、泣き出しそうな顔だった。

この事件によって、それ以後の週一回の面会交渉は取り止めとなった。

クミの心にはしばらくショックが残った。夫がまさかあんな暴挙に出るとは思わなかった。それにちょっとでもタイミングが悪ければ大事故になってのだから。もしかしたら、車が走り出した後に隆志が飛び出てひどい怪我を負ったかもしれない、そして後ろから来た車にはねられてしまったかもしれない。ホームページを作っている、そんな恐ろしい映像が浮かんで、夫に対する怒りがこみ上げて来て仕事が手につかなくなるのだった。そんなときはデザインにも赤などの攻撃的な色を選びたくなるのだった。